槃後集

六

文
104
二

へ 2
719
2

東京市麻布区霞町百拾貳番地
坪内雄蔵

門へ利10
號719
巻2

琴後集巻十一

序

素茶樵書序

水をえらみて清きかれをくみ。ゐをかちて宮治山のおれも拔ゐるこゝろはやくよりの事をもめる人のもてあそびくはして。今をこのもはよんいつる人なきおほのめる。されいそをのうれ光をわすれずをきみ見。ちれすくるこゝろあるしかし。もろふ古春ゆしのだいもと世をすあるつくひ三るされるけ。かのそよらぶもろめる人。おをこそそ一きはこやゐたるふるう詩をしひをるそへよとてか蓍。年いこつのとろる。さみるれるけ。平素海すいつく。

明治三十六年十一月 日
坪内雄蔵氏寄贈

門 へ
號 719
卷 2

舊蹟遺聞序

國郡のあるかぎり。山河もあるべきの沿革をしるして。書よ我
れるるべき。寧樂ゆみやの作時。しめてまこれたいせ
言ゝはをりて。さるさしめ沿ひ。まさに延長の作時。かさひを
るおこさせ沿ひて。さゝよきるゝを。ゝさせ沿ひつをを。六十
あまりの國これ。るるきあゝもゝさに他へ来まるを。
時うはりを奉ゝりて。今はその書ともおぼくいうせなう。
さてたゝくよちりはれるるもつはるを國二ゆまい
さきに。かれいそよありていゝへのくまこはりの大宮を
えるへよりそたゝ民部の式神名乃帳順朝長の和名東
山のおゝゝ乃指芥のゝゝひはをあるをれとおれくさくの

書ともは。國をかゝへ郡をつゝよりゝあこまて。古の沿を考る
ゝ乃を行ゝたゝいすさのるをゝゝの海をゝ沿をゝをれふ
事二ゝをゝをゝ杉のつゝゝ沿つ乃ゝ。を道ゝよゝ乃むる
人ゝいてゝまゝて来ゝ。をはくゝみをゝるき沿を考へあつめ
ゝる書とゝ。ゝるゝかゝふやうゝおほくゆえゝゝ。ゝを
くゝゝい。仙基の住ゝ来義和の国考の志といゝあゝて。くは
ゝくゝひ。度くはつゝゝゝれと。をゝきゝれ。を君の知ゝ沿ゝ
ゝをひゝたくゝゝくゝて。あゝゝかゝゝはなゝゝゝしたる
ゝもおほゝゝ。ゝふ　豊岡の君を。を遠つ住祖乃
住ゝゝより。を國ゝろしめ及ゝ今ゝいゝゝ六ゝゝを。せを
かゝをねゝゝふゝ三十あゝゝ六せ継ゝなんれをゝる。ゝるい

古のすがたもわすれしかとそ。又すてられることもあるをこゝろ
とんとそ。よ[illegible]つゝおほ[illegible]いつゝぬかゝれくまはそこも所々あ
まりに。ものゝるき法のすゝもきるせる書ゝ。れそをさゝぬを
あの法おもほゝとそて。れゆゝとゝゝぬ人このなかゝ。を事
ふゝとゝなるをゝゝを法ゝゝひて。その書法ゝゝたゝまふ。を如を法ゝ
ふゝを。那の数十といひてなほあまりのれと。いま一人のをゝり
ゆゝえぬふゝくゝを法おきて。ゆるき書よあゝゝれるかゝゝ城
集ゝゝを法ゝ。をゝを舊蹟を問と所んつゝゝれる。その書
をゝりて後。を法を法ゝの人ゝをひゝみて。芳へ一ゝくゝとて志めし
たまふを。ゝゝふ。を書のゝを法。をゝゝゝゝるきゝゝゝる庶くゝゝる
をゝるゝいをゝゝゝゝもいをゝし。かゝをゝゝ國のゝる人の著かゝゝを

を人ゝを載ゝゝれゝるゝいゝめゝつゝゝゝれゝをゝといふ一ゝ。かゝゝをゝゝみし
かをゝんゝゝ。かゝゝゝゝをゝゝを法ゝゝ法ゝゝいをゝん。をゝゝゝゝれゝをゝも。
志ゝを法ゝゝふゝの。を書かゝゝみゝゝゝふゝあゝゝゝよゝゝ。を法ゝゝを法ゝゝ。
いゝゝ一ゝを考て今をゝゝゝゝ人ゝゝれゝゝたゝゝゝゝみゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ。
板ゝを法ゝゝを法ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ

しなふるあそ。詞の道も又かくのごとし。あれる世乃
みやひうれるまゝにまうもあまたゝび年たゝみをつゝとゝてた。
いつしかうきをゝひるるるゝはしこそおほくいにそなりたき。
かれいるまゝいみれもる。そゝをまなう。泉よあつていゆく
めをとも。おのつゝふすみゆくかれよ泉をんるいやひるる
あまをを。後よあまてはだ。あくるとゝをゝひて。とゝをゝよ泉き
淑をゝ法ぬるわさなれる。いとかゝるもかゝしやとの
友情水涙共も。詞の学よ歌くゞ文つくるみやひよんふすき人
おるる。まの比よけめの道の記を得ておのれよかゝ雑く。
女房の日記といふもの。そ乃そすもやんゝとれき歌のあゝ
る。れゝまゝるる窓乃うもおとうめれつゝへたるよいん。

ふゝきかゝるよ人のれもゝへるゝゝひもゝれかもあれとよくみ
もてゆきはゝられゝもゝとゝうをていふぬきいれかゝしゝ。きの
ふを世道の記をゝふるゝふゝゝも書きゝるれそのかゝおての
けゝひすきあゝ法といふをか人をひよみてあちゝれいをか
も詞のれもををよゝく法ゝてはきをつくるのあと
をゝとゝあゝる。今ゝのおすゝひをいをゝるれ。ゝ乃
女房のおうゝよゝ無もゝ。ゝへきれるいかきゝろふむゝをの
うほをゝしき茅すゝみすもゝ法ゝまゝゝしおいをゝひの
あておるゝつゝるもれとゝゝねそいとゝふめはゝのなれそも
くいうれるゝ人のむすめをゝふよそはくをゝしくも
をゝねとそのかゝる人をき霧のそをかゝもてをゝれよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

揖取のうしの法とう家よぼる〳〵ることで人のゆとうはつる
あるまおもかゝたりけのはゆうことよりてさはよおはく〳〵
ま〳〵乃書とゆと考〳〵を庵つれそそもれ行〳〵まちのたすけと
なるるをそれかうきるかくて年月よこのるをうい次くく
はるゝ世二くはのるみりう〳〵るも行いるとやえゆゝ事の
ある城。れ考〳〵きたるあとやとだゆゝとゆるかのかとおき
のをかと。うく〳〵なのすぢるはきる〳〵きゝるゝやゆゝく
かつ窓の灯をるよかきあ〳〵ぬ分のゝるれ〳〵ぬ月日をのゝ
れ〳〵れと。いるてすきる事をえ世ちくを年の冬。荷おれ
よはろよめされてみやらるのたるめるよあひきれるゆゝうり乃
を考〳〵。こやゝいちゝて春をもむゝとあをいさゝふ分の

をうるゝてとれゆゝたをよ知月るゝ〳〵るきうけゝいかうの日
なるとゝよはをゝうはいさるれりしゝよ物えくゝはのあき
はうれゆゝうれゆゝ中よいとうのやうれる柱の杖よちいきれるをを
むすひつきゝるを篇のはるゝようゝをれゝ〳〵つるかくを
の隆分ゝう人もえきゝてめゝつれすゆゝとやをゝゝもち
ゝるてゝうかゝゝてか庵のぬゝを氏人のゆゝをゝとやん
ゝとなきあるゝう〳〵ゝるゝるゝゝて。いゝ〳〵乃侯をのゝを
どもゝゝをゝゝゝゝゝなんあうきるゝれをゝも都の人ゝれん
いるゝれふゝとゝて誤をゝも正〳〵つれそかの疑はは田舎乃
法師うたくひゝるあゝゝゝまゝ揖取のあをのさ〳〵つゝゝて
はをうぬ〳〵ゝさゝ〳〵ハウの年月うゝうひゝひゝきるゝもはる

きりぬ。まことうけもてこんぬ言葉の林乃おくをもきてる〳〵され
なまあるひなき宴とおもへたいとうれしくてあはせまゐて
くるかていとあるをとうくくこんれはさまくも
いひかきしるすはかをこんおとのすくあなれこれるみ
もとう雑はの法師よりれるとこてはいひまるもをを
いす一のあとをもまこたるのすなきをもすをて
あきくるかおるいうかるゆえのあくせこのえくみかきこを
人得ぬ法師のかくることとしていてのはかんやまく揖斐の
あまのきるせることをもおにまくこれとあはの名をは
はくめようかくていたに故人の方をこあまることを
まるをもんをもこのいきくるのさたをのるをとこも

あるをぬくきををもをまをとをとをこんはこれ名をいとかく
すくきるるは浮の道にかくやきれるまとこきけかくんか
うくをををおくをしてるみくくをはくををこんを
おのうひとかをひ得るるるくあかてに人のたをきをもかるをぬ
くきすもあくはなくくてもあるおくををくくきんもあて
だく人のいくることをのこをろひあつをはのをいはるくん
をはまいひおをんいかをとをきおかくれるつをれるおかくなれ
うひををの人をこのゆえをををくきくぬかをきを
るをかをもおもひぬくくをれとこはある人の人のつこ
まれつをたくむくき葉をこをあなれなれ都人かく
はをれきるをかをもすををはをれて宴えるかを

おもひきるそくもさしきかくて此本の反を書すこえゆく
ゆくさきよかさすゑもすてのそをれいふとつれくふるをんな
さ人のひとりつとさすて来てほるの火もゆるよりそうつて
物かたりもするを此つとさをとりてうぶたるゝる事ともぬきて
はしぶりかたくあきたるふを父のめをはるゝすきてはば
なの事やさこの人こう歌をよふくきものいひなりとは
いさゝかぬものをとそをいなみさすへを牡あきはゆふをき
をもふをさしてやこつを取うてかるをを彩る一人のををら
しのうをを。

いをそかくまを拔をり年を世をうつる雜

もみつる杖をさをはしめあを

東歌の序

伊をはゆもゆくしをを二荒の宮れ大神。をの下むを年くを珍
ひて。をたをろをぬ國もなく。はり来ぬえひをもあるをおくみ
いつくしをををぬくをれんをすをくををを。ゆ人をかを衣
をををよをけを。玉のうをてかをれをくををあを。民をを言鞆の
かををををををきををを。八十のちをををををををををを
をのををかをる月日を我を歌をををををををををを
をるをををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを

ゆゑよしなくあり狩のくるまはしきかるもあるんなんあり
ふ
ゆくるさるいはるるくるみるるよかみのしなしあるらよう
まとよるそそよすくれる人くもあさるれてそれ名
やそもくよゆえうるれときつるまたいやしき和ともかう
れやすくまの出いつ垂きなくねそ今さてよるもいてく
いふくくもあるはるそもものたれきさみまも月乃そらい
ふるまくんさしていもかるのうくれかとあく人くもれ
かきいてまるきり。きれをあるるるせよてくくるふ。狩
そ城すくれるるとおほゆるくひなせあり来。それよ
おうよ。おしてるや難波の国殊のいほのひ。そきの
山城のいおるの山れくふるそそ名をくるちりくしも

きこえるれこの三人れをくそよ底よりてよるおれまひ
いるくふたちかあるりぬれあるるををきるくる女人も
おくくいてまるきり。きはあれと得るるるる詠えぬとろ
たるひるもあるて。歩ひのちからかるるか。て歌の
んよおくれ。うるもむかるるんりるいおそはなひの
るれおろそそれをる得るれたれる来るる城
ものるるつをかて。そるるすれ人もゆるくるい縣居の
大人。在満の名称。さていい橋の義なんあり来る。此三人のめ
るるち。その歩れるる詠い出くよあるから。弱のるつるを
おるひうるかるこるそそ。んくるるそきくくかを大人を。
居とのまたのるを。のそ。歩もるひかるきいるくのうき

きゝもきゝふるとみ。宮祢と。秋のみゝよあやあくふのすきけてほ
やうなる中比のゝくみをとよはゝこ。義い系行乃こゝやさゝに
はゝきゝるこゝ落ゝたあゝて。ふゝれきのだゝつゝるかゝきゝ
屋をこゝみて。ゆゝまきんよゝみゝくれいぶゝ。ゝもゝす。
後もつゝたゝ。ゝれと。ゝゝるれすゝゝゝゝるゝゝゝゝいてや
ゝの人こはゝも。ゝゝいふゝくゝゝゝたゝもゝんゝたゝゝゝのゝれ
ゝゝゝゝれゝゝくゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ事
きゝゝゝ。ゝれゝ。今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なり。系之といへるは時代。品々家いぼろひよたりかくて
後京こゝもそこかくれて。い者さといふ不よおせうもの所きる
景之もむさし。重政よりいてゝ紀の殿よりはつかぬ。
義もこの重政より四つきの後にて。わうもし時は江戸か
まにて。まもの時をれて下りめされまつりけれども
九十あまり四にて。を昭の立と者八月よりなん身はすける。
さてこそ家あまて。中比よりて義系となのる東つるを。
きゝよりはうちうるもちかへて。槍を用ゐるこゝを
義よりとかんきこえし。

享和のきしめろま

森昭紀童謡序

むりし前田宮祢の大人。古言のすがひのことをこゝろをて
ゐめていうへ乃書しふこゝ紀えかるさゝるものある城。
生まれ人にはしめておるひあきらめられるよしおか
からも中に。世これ。この考をはこゝる先はらたちと
こゝろをいはゝうてをいるやすく人にもいきに。一の
学ゐ人のつゝん人のいて見んをもちて伊よへしてを。
ち後にひめおりれつゝをよりけんのまをいふりてが義の
義。よこはきはこゝるすゝれるゝをこゝ後を走て。
今をこ城はさへん人をいまに定てのこゝをあれ。まし
こゝもつひに学ひの多用つまおと。我おらひはゝれり
さいとくに。よみうへき人なれそ。義を形。につゝはる人

ふはひうまきそそ。されそその荷田の翁まつりそへ。たゝ
一人まのそこ詠さして。伴へてこそ事なれいとそ。孫も
又うゝくんこつみて。さそもうされすなんを書き城。年
六十ヨおほくすれ詠ひて後。おのゝ父ゝむ ゝてのさそひ
書ゝく。おのゝ詠うるのこと。そなんいかゝこはゝふ書よ。
おそ荷田の大人入みさはめとまれるものそお詠そ孫
うひそそそ。をつゝ一書ヨ書して詠ちかぬそはう
えれまのつむくゝも伴へ白てゆんこ城おかし枯きて
なまくゝ詠んを書ゝ。さてと自毎めゝ。おのゝ父も
せゝゝも。孫こそ詠ちうせ書れそ。孫うちかそき。
ワの後をそなのむ人ゝおこそて。いゝく

をしまれつゝ。ヲ伴ゝう珍ひたんとすゝきはこいゝうて。
本はを病の変ちゝくめしての珍ふすいかのこ尾ヲ乃
伴へ。いゝ父こ伴ゝ。へゝゝ詠ふ。をすはを。おゝく
家こ伴へそその珍ひ書。そかみ書はなるひゝゝ。ぱく
年ワゝくこ詠つゝ孫書ヲて。おのれのさはを書ヲ毎
もゝゝそこいゝとやそうぬこはゝぢ入いはそこそ
あゝめ。いそわゝくのおゝとかゝへきゝさはゝんと
おもひ宮そ。楷よ孫。森系宮こは。尾孫こ書ゝ
こゝきこんせそ。めゝゝちゝ書よはひもゝちはこう。物乃
あゝ詠もいゝこみ書れ。おのゝ書きこはぬゝゝもの伴へ
珍そんものかヲそ。ゆつゝいひ書れそ。いそかゝこ宮

あるまでこはそのゐなさえうかゝやうに度まにぞ水の水
まもなえせさるこゝとさぞれもひとゝゝられることあれ。
義のゝゝ行ゝはるむくゝゝゝゝゝそみゝゝの人ゝゝうけ
ゝゝゝゝゝゝゝしがくてあまの玄秋をおゝゝむゝる
はゝゝ美樹見せい雲ゝあゝゝたゝ。ふ義をゝけいすてゝ
なゝく。美海い家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝて。今い雲ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おはやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やゝはゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

裏おのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

契沖法師富士百首の序

契沖法師の富士ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今は新所のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さてこうふくしくすばけいおかしみ巻を文をちらさえ
くして巻すみていろ〳〵ちるあるをたれまつちりをけく
よはるのたをこかれをるやあり平。

家顔抄補正序

れかよそうはしみの巻をあるをなる人をあるれを
あいて。ふるなまふるあくさるたし。をおふるひさ
ちるおさ附ふ。あれもをふみもてあくん事を潜を。
ろれんをつみはぬ叶れかたし拝まるて古巻その
おをくふ宮巻をいやうを言ふいてうふ。をるるふ時を
何をあやいるんをるををかあるを。おれをもをを。ふ
なるぬ巻をを地のわるれるあるをしは皇祥のをつうをを合へ

けしめ給ひ巻をちりおこかを。いくをよ後つのそれをを
まるもを。へてをかりしものの人。れをもてんをやこをは
なしをおをそうをうくなれをを人ををちれまを附を
けををを。たくいひをつるわをなれを。かしをを補を
おをしつを巻をだるを人をもくををへしをを
られを巻を附をへて。をくいひつく叶を。をるれるを
ををの下ををれをを。おれをを人乃人をを詞をを附
なを。えを。をやを見巻をを。今れをつをを。れををを
しを。をけをををを附ををち。人ををををるをなけををを
かをををを。れをを言葉のをなをを國のをををのを
あやをををを。へをを巻を附を。きをを巻をれを

わかいう一の学をこれをよれるをとなを
ふをとあるなんをあるを戒兼永雅楽宮の侍時うの
ちなるをうをそうをえうひあつめられる集いとたえ
せされをわかつかれ事おしをいとをつせおれを
もけをと書けるをもの之ゆえ侍をくやをふみを
をちけるあををせつをたをとををををををを
載られるられをもの分けみおをかるををられて乃
をう世乃ををき人をいををうをを用ひをかけを
をを日本紀なる侍弘仁の後時より後をこの侍ををちの
からをちあををかを今をを下部宮孫う称より月ををを
をかつくををう又ををををををををを迫

人をやくをうをうをうをうをあをををををを
をををををををををををををををををををを
られををををををををををををををををを
学をすをられをれいをを先やをををををををを
をを於ひををををををををををををををを
侍毎を古事記をををををををををををを
をつををををなんををををををををを
をくをかをくををかをれる事いをれををををををを
あをれ中納言の実乃世乃ををあを又法師の法をひの
くををき遠くをの人ををををををををを
雅波の里人若山滋古ををかの法師をおををを百年ふ

あまりて。はるよ今せるかすゝひかき物〜すべ人なるか。
古の学まんをつゝむるもとゝふ。の法はうちうちくめてたし
きをいへとも。狩あるぬすれおかるをゝしみて。のちのた
せよはなひの名ゆえるる人こゝろかを芳へいあるこゝ
とものをを。虚くとひあまよくはつめてよたをはひろひ
あしきをはをく。たゝもぬをれよるひ。初のめるを正して。
さゝふ補正と名つ半て。法師す注さくこゝも海さかゝしむ。
此ゝみ一度せよおこなはをきしのを。たれ学よゝ海さし
あゝん人。ゝれのおのめ〜乃いさをゝ我ゝむゝしてゝる
ゝ海さゝん。きをいてをもゝ人あて。今のせるみゝかゝつゝひ
はゝ。ゝれいあゝ用まあをけを。海ようそむきてあゝは。事

たるぬへゝしといひて。たいをかよはゝゝ学あるも杉あを
さゝ法あゝん。又ゝるかゝよ杉ゆ上ほあるぬへゝれいそれを
わの言くはゝ一きわをゝうけあゝたを義。文化とりゝをしの
二と勢。九月ゝをゝいつ。

橘千蔭古今集序墨帖序

かゝん歌のいて来しはめゝをのまれいとむゝゝるるをを
うはをて。つをゝ一つのすかゝとゝをなをよ学ゝをあかう
たゝををはゆえををゝし。今の都とゝるてをもはゝとゝいく
来をゝる。を業の法乃とのをよ侍へゝる。貴をのゝ遠風の教化
なをゝを学。ゝをゝ〜ゝをゝはいゝめれ。ゝをゝを海なるい。
をゝゝくゝよおほくはをゝ。をのすかゝをゝはくゝゝれを学る。

[illegible]
あるめりもいてまて。ぶやーきもあるまてまて。花山
一條の法皇時よりとつ[illegible]
かたしして。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

山法と序

[illegible]
[illegible]

家をすく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

義疏といひて大乗の尼こしきはさくひきす
ゝらくるをんを浮きよのきれすんなの苔ゐ。こと祖法
なるを仏ゝ〳〵いかんおよ書ゝ。こを仏典のかゝあゝ
ぬを仏ゝ法。さゝし四てまの法ゝうおき給へる法家おも
仏ゝこれを学まれさとゝくき給ゝる。尼給ひつゝと
いのいをゝ志う仏ゝ法。そを仏ゝ〳〵き家人ゝ
仏まれいてえせ給へといへゝ。ほゝ文廃のうちすゝまし
いてゝるゝとえゝ。かの学よいひまてゝやん。ゐ人の法門ゝち
の集まて。おまめ沖ゝしけもおし。ゝる法師のおゝし
ゝて特のゝいゝゝなきもうちゝまゝれゝ。ほゝこれゝふ
あゝんを。何をつゝれゝゝの友まはおゝきとてみあゝし

のほの学ゝのまゝのゝゝゝ

かの〳〵よをうゑるこゝまたんをきるそもゝ〻ゑ〻〻人の
古言よ名こそうゆゆるあゝしるよむ〻〻き人だゝとゝ〻ぶ
海ことなりきゝとゝそ世今とゆをゑるよつきて色おゆゝし
耳れきる文化の三とゝの秋

あやむ〻詩の序 言市立帝よかゝりの書
一名打柳集と云

やよいの十日あまり梅園院の初ゝうゝいんかゝ〻かし名ゝ
言記老木の花いけゝ〻ちすきゝるよひゝもきそめゝる
さくゝうおゝ今そ時得かほかる京のゑさゝいまうひん
のゝゝみきわゝゝしてやうれをゝむ人ゝのゆゝゝゝかの
さおちいてゝはゝるよれおうけゝかきあゝろの春風立
まゝゝして女房のゝゝとんもやのゝゝうのゝよ足本の三條の

はゝし一よろひをゝゝて人ゝるゝ仏の火とゝうおゝはたゝて
ぬさ枝さ海〻のかゝちよゆゝてゝそ乃枝ゝ法ゝゝ下
ゝきゝ詩よゝ紙ゝ。ゝかゝのゝんゝきゝかゝのゝけう
さんしてゝ硯のゝゝうゝせゝゝれゝゝまの下形ゝ花かゝ水。
おほゝきゝゝれゝ御の枝をゝきゝてゝそれ京をゝゝうゝゝけふ
のんゝゝ〻ゝ〻ゝ乃ゝ〻しかゝてゝ詩をゝゝゝゝとゝ氣ゝ多いゝゝ
ゝきゝてゝ讃ゝしゝかゝゝ水ゝ。人おのかゝ霧ゝゝれ来て。夕陽日
ほのゝれゝゝ法ゝ法ゝよゝすんかゝうれてゝゝゝゝぬゝゝみゝゝきゝゝゝ
九人ゝゝゝ九つゝゝゝゝう一法。姫ゝゝゝみゝゝもあゝまゝなゝ乗
あゝゝきゝ。

寛政六年弥生

琴後集の序

人のことゝはおぼゆる中よ。されてうるはしかく業よ
なんるときゝる。そのうゝよ。ぜんうちえてけとゝのいちきるきゝの
そゆきかひらみのせさ海之きゝ。たゝれき草はすたうふ。
あやしくも。なてゝるもいあ所しくもこゆゝるゝのゝしあ
をはいとつゝす　れるをなかやさそゝあすれるゝもてゝぬ
もうれんのあさすゝ。ふつきるゝゝすてゝもそこやれふ。
そゝはあすかゝんをゝみてゝこと知ゝのかゝゝもゝをゝしく。
よみいてゝるゝもゝゝもゝ体とゝおち書ゝゝん。ゝうくゝよ
えれゝゝするゝ体よなゝゝゝゝ。そゝもゝゝゝおのゝゝかゝあり
かなゝそ。あゝゝはきくゝはゝゝゝゝゝゝたゝゝゝゝかゝゝゝてはん

れてゝきゝえめ。あるゝのゝきゝゝゝゝゝゝ

こゝろの林乃おくもまみ。をの路乃ふるきたゝしもゝ
ゝまもまもゝしゝまかるもさみも。古のこやひよとて
かれもねゝきれ。さもとおほまゝ人のよひいてんよいよし
やあゝや。ばるゝこゝ世人のこゝ語ゝゝよなんあるゝよ。

琴曲新譜序

今の世ゝ人のゆてあゝよめる。法くゝゝこの曲とゝ名ふるも
れゝ。いつれ乃時ゝゝゝおゝかきんゝゝふかゝゝれゝ。
ゝゝ乃人のいひつゝゝゝるゝ。大ゝ乃はゝゝゝや。流後のくふ
善ゝゝゝゝすみゝゝる僧の。あるやむゝゝれよ家よひめ給へる
を。ゝゝいゝゝゝゝ

あらまし書てよとあれば、そのようにまかりたるまま、
書ふゝめつゝ。

万葉集後續記序

寛政のとしのつゝ。信夫道別。安田躬弦なるものあり。
黄室国より法として万葉集かうへよむのあかさるい
此集のまゝ肌ひする人〳〵をそなおぼくいてまでさぬく
あきたらひつゝ。ものいとよく思ひ得ぬ。ものつゝうるのと
おもふゆゑにもあれど。又ことさゝよひすみもてゆきてあぬ
かるとよろこばれるたゝひもあれて。一かたなるぬを。ふ信す
おもひきたいそこのゝ。ゆるくよいれるを。考へさしめて。
あまの肌ひの人乃。道きるへるせやほきとてあひやめ

よ。あゝ定めいひてかとうる得るる所ぬ所をあきたら
ふゝとゝいうまめをとてこゝをを強でよみをはりなる
後よ。ゆ義茅よりて略解をいきるまたりきそもゝ略解一乃
わふむよいゆゝこゝをかるうて。ふれんをあこさをしやも
かゝしまりをふひられそ事ふすきあきたゝひもいうあ
代匠記。万葉考なるよゆつりて。しをいきことをゝ我をた。志
るに。きつゝもゝ。ゝたうゝひ多ゝ。さをいゝと。縣居
の義乃いをれることもゝ。ものもとてゝ。ちをたけの人の考ゝも
ふも庶くとりて。学ようゝ。ゆき説をえゝひあきゝれ。
此集一まるゝんゆんすゝ。かゝてゝれをもいひ巻し。他
ゑゝゝく此集のおもむきを。きゝんと松田ゝん人いをの略解を

おとゝ所にてゆゑ〳〵の涙さくさもすゝ〳〵芳かい。おのゝ花のうつ
ろひもいうるゝ。ものなんかしそはを人のかゝるこゝろをふく
わるゝ世。居ながらしるゝ人〳〵。おのゝ此集よまんこゝろもわ
むもい。先映ふるゝ。そこ流ひてよみもてゆくゝまゝ
よゝとて定めい人る事ゝもそゝいうゝそ。おかゆゝ。ゝるき
すもあゝす。又れまい多後かんなゝとてすゝてゝる流てゝも。
引いてつ巻さゝゝいもあゝ。又あたゝふゝうゝるゝとゝもゝ
以てゝうてゝれゝ。ゝゝいさゝゝるゝ。ゝゝそゝさゝ
志の後。ゝゝゝゝみかんゝのたゝきゝるゝとゝてなゝ。

享和の三とせ八月

かゝ家の序

あるやむゝとゝるゝきおゝまゝゝみ。ゝゝ事ゝとゝはゝゝしゝゝるゝ。ゝてふ
をゝのゝとゝゝゝ人ゝをいゝうゝん浮ゝきゝの珍ふゝれゝいゝゝゝ伊勢の國
人ゝうゝのゝゝるゝこゝと恋のゝ玉珍ゝゝゝゝゝゝゝれゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ境一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゐらすべしとて。おもとを人のもとへ
はゐらせ給へ。こはまゐらせくかのまゐらせのかたもをかれ。
かゝるものとおつきぬ。おもとを又殆ひて。ことゝろこゝ
ろ大きさよおもひ
まゐらせたり。さてよかのむ殆よ思るせることわるもくはなく
ゐひとう殆へ。れい。今い例すくなく耳遠きたくひをは。
すくゝゆゝ法ふゝよゆゆ法ゆて。皆そふきかたゝ方殺し
殆そん殆まゐて。かをやをまゐ者。

聞中と人の都まゐかたゆゝをおくる武尊

いまゝへのかゝゐこれめる人を。かゐ殆ゐ國ゐかゐもよく
せゐ。かくてくゐふまゐふ人を。又かゝゐ人をもよくか
よはゝ。ふ殆ゐ。ゐ殆の殆。殆殆ゐ殆ゐ。遊ふつとひて。

かれうゝへゐ。わをこゝゝて。かゝるあひもつを入ることを殆よ
廣大和のきもつもあゝ。ゐたなんをきゝそゝろゝしといひ。
わをひをのゝるゐたなることゝ。ふゝるゝしもおきれをなを。
今のかゝゐこめる人を。いゝ一よゝゐれ。かれをゝ國の
ことゝゐをうはゝまゐ。あれをゝをゝんとなて。
わゝうゐれいてゝゝんくゝゐをきめゝゐをゝも
ゐひゝゝゝ。かくて我わゐゐうたゝ人を。かれをはゝゐ
おもひゝゝゝ。ことゝゝくゝかゝゝつをゝやをいをゝてもあゐ
なゝん。まれをかをゝをゐわれ。かゝまゐゝとゝ人もいてくめを。
かれをあひゝをゝふゝ。ゐ殆ゐ。ゐ殆ゐ殆ゐ殆

なもまことにあるべしとこそせんなれ。こはそのおがみ　みち
かる事をまねびてこれをかるものとかるよ心ひかつめ〻。
せのうしろひ時よりおれて。人のおゝはーうつろひゆく
ことわりのつうれるこゝろわるだかといふ人とい。すーへるもち
かへるこゝろ人もうしてあるわるけあるやさすを聞中大徳
はーもかゝるおれたるよんふうかる事。さやーせるもたてえ
さるこの海と大和言の葉乃林をもかてよくわる國ちう
をもうるひ詩人ぞはるとやかれよかはまとうるへるうるその
せのなるはーをうひすて。ふを稀とまるをもがしらも
ちもるるつかきをよくあきらめ珍ひるるなんそう
たゝひかきまれなりまるさる花のかけるいうれを

もてはやすもそこ底くてあひとめ彫人おかうなれる。
かくてしもちの人乃。まれ秋月ふのをうよつ半はゝ。か月
うるひ。うつうるまきてをいひ。ひいをの人てかるも
大和もべるとかきゝ和ひゝろを。今のそよあるそれあひみる
乗くなんあるいめつゝ。れうとるをいゝ人きれ。さるう
大徳。を月れかうはしもすあかるゝ海よ都るのはうゆゝ
さまひなんとゝるをぞ。はるたまあへる。庵大和のうる人。
おれ彫むるる来あひて。馬のくるむきーつ。ぞるく
わうれをーむんをうるひいてるるいかれもなくわれもかゞ。
かゝるれひきるこゝ海を。ゝるきをるれ彫あゝさうける。
まる海をるゝ。おれーんきうの人のはゝよかきはへるれとるゝを。

たゝゝやとゝとて。ゝゝとゝさは法のゝゝゝゝ見えゝゝる。十くさの
ゝゝゝゝの河をかゝて。さゝゝゝゝ

はゆる城をたてしよりこのかた八十の世代をへてふつ神を
あがめまつる人をいつくしみて天皇のきませる國のまほ
ろばもの後世よなんをきしかしそれとつ代の玉造縣をて
をしたてまつりしかの事のくはしきよしをもくしてし
て考へいとあるべきもあるべしかの中つせの
國つうをれかくるひくかたちにかくれたる中にはなく
いつへき業なりねいかにしいつかもあるべきかの此君
をもかくれたるかくれたるをあがめまつるそのとしをふる
をはふるのわとなつきてそのおぼえいよかしこかるものの
いきたひとをもてるきるそもくくに肥の道のつる延喜の
君たちもかの國乃美の貴きふるまひをしきてよかし

これたまたまはきたりて聖のたまつかへまつりふ
文屋のはつををたちて物をまつりて文人をかれし
みちひきをひまるまれハ物をまくおほくはたらひたるる
ちひとをもあすさいてをてはやく天の下をもやえたる後乃
そまてをいひつくくなんあることハむすこ素海のつかをも
しはるその時をかりをきる秋山の義をあひてをくはきよし
をてをまをるをつよるをの大人をかの文屋の時をなるを。五
とをの書をとりて読人を教るいとをよ皇を國のいすに一の
書をも考へ又縣居の義のをるををつをもをみてひををふ
ををしをひつをかくく文屋のをとをよをおをしをひつれど此
みくまの学ひの事をれをぬをたいとあるぬをたかをいうて

大和国ひなん人をとゝて。古城その君すもをし。ゆこ
あゝしけるの人ゝもたゝまつる。八十ゞ人をの中よりぬ。長
宵の家れるとえゝみいて。ゝのすをしもそおほせたるをるい
ゝ皆のぬしの後園の柴まゝくすゝ。ゝたのんゝゆきとはれる
事い。すゝことゝくはゝ〳〵もあゝぬをそてゆめ。ゝるんゝよりて
たゝたゝやゝひきん。ゝゝよ縣居の家のを〳〵を庭ゝとひ
さき。ゝはゝくきゝおきゝめをやゝて。神風の伊勢の国ゝ
いゝゝてを本居宣長ゝ名つきをおくゝも。ゝるゝなゝ東乃
とゝはのみゝとゝゝてを。源清良橋千蔭ゝゝ。おんゝこゝぬ
ゝひきる。おのれをゝゝもゝかきゝめかゝ。むゝ〳〵縣居の庭を
ゝみなゝゝゝ人のつゝなれいとゝてをかゝゝひゝゝ〳〵我

志のひてゝゝかゝむつをひけるを。今年弥生の末ゝ花を玉よ
か奉ゝ仍なんとゝかゝて別をゝむ人ゝゝけのむしろを
はゝゝ。ゝまのそれむきをとなんきれるゝ。亞をゝゝくゝ来海の
ゝとゝてすゝくゝまゝゝそか〳〵ゝめおゝそ。ゝかしこゝ大和
たゝ〳〵ひゝをゝて。その國人をみちひきとつ代の學ぶ道を。今
ゝゝゝのむゝおゝゝゝぬゝくゝ。ゝんゝ乃はゝあひ。ん
ゝをゝゝゝかゝ。ゝをのゝ大人ゝいゝをゝ。ゝめ〳〵ゝゝて
あゝゝゝれ。ゝゝてゝゝ君乃。学ぶゝゝふゝみ。ゝゝ人ゝゝは。
いゝゝをかゝゝと。ゝゝてゝゝ後ゝゝひ。ゝゝをゝゝん。ゝゝいおのゝゝち
のゝゝゝゝゝゝ。れ別ゝいゝゝゝゝもあゝゝゝゝゝゝ

こゝのかゝりのことゝもせんとて。杯のくゝをひろめてそゝ
ぐとのこと。

年月をふる里のよろこぶるとゝもるゝとゝの友なるすれそ
も曽祖父又兵衛のくゝる序

むゝ一人の茶湯をすきるゝ。幸そき物おろそかれるとゝの
ゆるしゝ。今乃そうは。得かゝるときゝ。ものゝあゝひおきゝ
さゝひをあゝゝゝ事とゝなるゝゝるゝさゝいもと志川
きよゝ城や一おひその茶をのゝる人きゝれなるゝと。今ゝ
ゝゝきゝひ。人よてゝひて。よゝゝたゝゝきゝるゝ。人の
こゝろれうつゝろひゝゝゝす。すゝてそのなゝはゝとゝいゝと。
うゝゝあゝゝゝゝなゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ曽祖のぬゝ。此道

のすき人なるものかのすきそふなゝひおきすれゝたゝて。
きつきゝよゝをやゝなゝゝむゝ一人の歌をなゝきゝゝめゝ。今ハ
はゝ人の道をもきゝきゝて。かゝりそめゝるゝをやゝと。市の中の
かゝれゝうゝて。かゝはゝゝ本れゝめゝゝとゝはゝゝ宇治の山里ゝ
ゝゝめゝさむきみゝひゝ。ちゝのゝくゝすゝゝゝはのゝゝれゝゝくみて。
きゝれを飽タれゝやゝゝゝとゝゝゝゝれゝゝれゝもはやゝう
うゝはゝき友なれいとて。ゝひとゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝれゝ。

やゝ人のゝはひのふゝて本のめゝゝゝ老のゝゝはゝすゝゝゝれ
ゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

琴後集巻十二

跋

千年の色の跋

縣居の翁乃著の歌みつのすがたなんを巻ろれ
始のほとたるいまゝふうるはきをもをとたて。かる
ろめるもみるれるおなす。をゆらの社なるいそよかゝら
ぬ言ひんを一あすて。やうまくきうばひをうせてたの
はうるはきいまばひあるこうの末乃たとなるを。物を
ものもあるは。おもひきちて。昔ゆふくはくろひるれ
るーおく。んやをのすをみなるおんおほうのける。今此をを
えるを。そのをしめなる。井形。末なるず人不ををせる

のせるもの。歌は葉の詞をつくせるもの。詞は葉の詞をつくせるもの。いてやおもをこむ人。歌の筆乃詞をたゞよゝこゝるべきのこゝろはそのはこゝろばのこゝろひとも。わがゆひきるべきまことあなれあはこし人のこゝろよ。うれ葉の詞をこそ。その人乃心ゝひとこゝろいべふこゝはこゝろよさゝかるゝ

美紫佳調跋

歌よいすゝへのまつかあるそれまちかるそれいすゝへそおくゝそこゝまよ清ゝよゝ古のすかこゝろひあはるあてゝゝも。こゝろ清ゝろひ来しこゝはゝもゝ。こゝるべきこゝろなゝこゝるかもいすゝへゝゝいすゝへゝそゝいすれこゝて今まゝをつゝてゝゝ。角をわるゝこゝるべきゝ。されゝも葉のめゝよゝふ

わるゝふんあゝてはんゝふゝゝのゝちれゝゝやいかゝはゝゝ。うゝふはゝきゝをゝゝゝみいてゝが乃いすゝへのかまゝはのゝみかゝかゝゝゝやゝゝ今のかんゝるようゝしゝてゝその人の為とせゝいてやゝ古ゝのゝ人ゝゝゝゝゝもいゝゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝもゝ。ゝゝをゝゝいすゝへゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ

うけまもりてよりそ。やうやくひろまりにきるべきすけあれど。
宇多醍醐の御時よりつぼねの山一條の御時までの。もろもろの
集どもに城考るに。題詠の歌ども数おほかるぬをそれをも
せこの歌人どもに。ちらしをかすべく人のまねとなりぬるよりそ
をけるし。それよりも世をそくるまで。堀河乃院のよりもおくを。
せこの歌後をかすべよりなりもてゆきて。今のそとなりてはた大
かこの歌人。題ばかりふるまはれを。歌はよむべきものとも
べひとりなんなるべくそもくその世よ。題詠のみ
ばかりをれるべくるを。末のそれなるけれそ。いまの人は
うむくるまれと。そこはあるてはえもすてかさねこのゆゑ
あるを。そはいかなるべくいまの人のことをいも。歌

詞をそれまもあることをかくてよのつのことをたすくて
みやひうるをきをいろあるものをきてをきをよりへう
ぬをなしがれををうるれをよあひてよみいつることを
やまかるくさてはうまをてよまんすいまれをぬを。
今のそをは人のあいひをとしてをくるにつきのそれを
をれを。歌をはんとするをいををおまををしをのある
をあくるもあるをあくをれをかしかくをのつのをわを
をを。をとをををかうをめれを。歌をよみ入るべき事をを
ゆくしををみやひうをくんををあくをしてを
ををかくしをれををみをうをおをは。いをを歌やは
かるくをは。をををはあをまををまををををみいをん

事をかさねるまでぼうきゝる歌よまるゝ人ぞおし
やるくておさやうの人〳〵かれをそのそれ人の歌詠
のこゝゆけうなるすとかるまゝぶ杉のつゝかるいきほひ
まれんをきる。このおもむきをもつくおもへよ。題詠といへ
ゝ古よあるをはかゝこのまたなりといへ〳〵。今まあを
てを。ゑよむをしたてなりとこゝいへ〳〵きれ。あゞへ人をゝ
をゝふ古城きゝゝ人をもゝ。ゑれまれひやんまは。ぜをし
たをよゝよゝしていぶつれの道をはゝまん。志うが城
にかしをき人のまれをいまゝをまれ〳〵きれ。歌詠は
後のなゝはなれぶきゝをひかゝゝといひてあれかちふ
いひきゝんとするはゝゝ事のゝをもくみゝて。これ

琴後集十二

もまをれてゝ。ゝ歌まゝをゝりていゝなれをいをくうけ
かゝゝしをゝよ清水雄風ぬゝをゝ。をたまあゝるをまを。ゑ
用よあをけゝ花をまをあをゝて世ゝのゝ恋のをゝも。香
をもはみをもゝるぬゝをゝ。をれまかゝりをゝくゝ。ゑひ
まれひの人をみちひうんまは。かゝゝ歌詠よまゝをゝん
事いをゝよ論ゝいゝ〳〵きゝをかきれを。そのそれ人のた
よゝをとなゝてゝをゝあはをまめ。此歌。題林のゑゝひをれのを
おかれをみれいをゝをれは。ゆる題をゝはゝをゝをれ
ゑをゝを。歌のゝ歌あをゝん。ゝあまをゝをゝをぬ〳〵きれを。あは
まゝゝ。ふをゝをれるゑれは。ゆるいゝゆゝれ。牡のゝ浮ゝゝ春
人ゝを。よゝゝえゝいてゝをゝをゝゝれをゝをゝれ。かのまひ

まれひのとも多く。さはすると思ふるとも。ふるたは
になれゆうはよみ出し。ものつゝみあしさはよなりもん
こゝいとほしきれいうて。歌をも。一すくうえくひて
あせをやとおもはいうと。此事わのおもふと。語
なれも。よ語こはしくて。そのかしいふたくさしを。
おのゝ語をえくひなすぬとて。人もる城みよ。先れ歌も。
あるくいて来るを代すくて。おとさん。旅なるをい今すくる
を考こ。又題の文字ま。も。詞の考よかりたるものて。
おつ語ふ。ものを代るもおかきれおいさうあたるもあ。
歌ををとより。立歌よつをてよあるをさくさあるぬ。
かの古今六帖の例よかりくひて。歌をあるうて。ふいはうう

とゝかてあもせ載つ。おなすれ。ふのえくひさはいふた
を立詞耳とけうて。するたきあるくひをとり。後
なるをこをきくるゝてんやはくの歌るをたくひを
ぬよいてくり。おはあひよ歌ひの人をあるぬすかるよりなれ
おもしよの人を一なる一し。さはいとこれをわくくしのこれ
みくはまのをもて。おなやきるもくくしるもそ乃
ふ人のえくひおきる集ともうもなるをのをとりて。古れ
人乃ふ語ひもやし。家集ともなとりくひより利。
おとさくよりいてくるのおきいは先なるんよりれおち
なるをなえ。えをしとおるへるをを。かくはよあくる城めて。
芽宜園の歌ふるくをふくさはしよりいひきんふる

ことの契まさてだにもしるき野ゝおすゝしさのあふ
つゝしうらをおかゆれいて平安集。そはれもれたまし
しかたゝふしまれの人ゝのことの林まきいんては
されをきをもとおさしていそはるまかよを。

文化のミとせといふまのかみなみやうかの日

月詣集跋

むゝ。定家のまゝもまれゝまゝ。ゝ。ゝ。

えやうをきこえん。此ふみもまことかんそこへきつのかも
ゆきあつ侍ぬ。よわ〻〻しく。今をかぎりのひいとあさはの不
なりもてゆきて。ゐる松集よまぜよ。おほく歌ゐるかあれど。
これをきてよるのすのうを考へ人せあるいとも〻こゝに文屋の
うもるたるく法をぬをもちひの落うちはつゝ事をとる
あうくれもひかゝひつの底よりあおきもつひこゝろの
すみうとなりをつゝよりふきはゝをとゝむへきまれたるう。
かくしつゝ年ゆかはおそくは学ゐるえゆをせ鶴。
せるは四條大納言のえゝひれよりはゝるくさゝ。又能因法師
のおつのおきる一まをとはしめて。續詞花集秋風方代乃
なくひの集とも。もゝくあるをすへてきくゝよ考へ言

屋て。これよりくをは侍へを底かくしめん。そのゆゑあるか
中よ重保のあうゝめしれ用ようてみおうををとゝる えゝるへ
もおくせよはれ布をもおれをとて先これをとかて拾よ
ををもかんとに。今をのんを用いゝる打るむきとゝふゝこれを
あゝ一集とものおうふさくうておなしきをゝて〻ゝこゝ
ふをあき。河乃ゝゝひをゝき。素一のゆをとゝわをほゝを
ゝ人乃氏をけよはうを伝をさゝよ考へいひて。これを忠宗
へうそへゝるゝくもゝとゆくはゝうなん。侯長ゝ法よ
人すて。まをゝすゝ考れるがのゆゝくの集をもゝくみぬく
ものしてをゝゝ法をしはゝをんゝうゝかひをしゝこれ
そを先ゝれとゝをしをのいををのまをかゝんゆゝあを。

きるも業とかして。をゆゑよりとうをきるべきれ。

文化の五とせ法のみ孔つきをつのすのよつの

滅亡坊昭然法師三十六人会墨帖後

いろ〳〵人のかんかをはゝるくも後くしく人の。をれをすのいて
くれをれ。狂をめんく〳〵いの殘をるを。せをるまるあるをぬ
かゝるかうれて。なつこ後いうやをてまるをか。かして滅亡の
法坊を。そよかきなゝいさひをしさはをはすて。おのれ一つの
をかゝをなんををめよをきるいふゝしくまるかくるふ
をあゝて。をめきてえせるかよめいるかををむとたて
くれを。今一よをつよき不をくをくはゝをかをとかをすし。
おのゝもあゝねと。人をるかるゝよ業をすみてゝるいさ後

かゝよをまれまを法とゝ我おふゆれ。をのもとをあをすをるゝ。
おへてせよ。此法坊乃業をゝるをもるゝれをてをはるつ
ゝう書をしたる一をゝをはをも人〳〵實とするを。此会の
はをゝくをれをすをて。おをるいゝ絶つるをとををていへきれ。
をれをゝも。孤坊の連法氏の家ゝ。しををををわをる我ゝ
をゝあゝふ。校よをゝたるをとる。

縣居翁自筆山里記跋

此山里の記を。縣居翁のかゝれるをゝ井ゝをゝををすゝれ
ゝうとすへゝし。伊勢乃法の亭を院会の記。ゝ神宮のおをゝの
天徳会合の記をををすゝめてかゝるたゝひ乃文せゝるあをを
あをてをよゝあゝいをゝくゝなれをおかをいるを拓ををねひ

来きるさこの記を記とかまはことをよかめひおこして。詞を
いまゝまとも。後をあゝゝゝよまう書てかゝれるいだ今ふ
たゝひもおほえきいとめつらゝ。清水演花翁てうせきう
かれるを得てやしはよ詠こひもるをおのの家ゝ
里のしる人一生ある我おくまて。生涯の末はせすむおを
れ乃のせうと。まつのゆ乃ゝを翁乃まつかし出改直
されるとかよ別よあゝゝめかれかる。

文化六とせ九月

同器部日記の長歌跋

あかるゝ翁の家集かよあつむる法いてよ。翁まつうう
かきさし給へうめなを。おゝれとゆをめいてるの中ふ。

去の記よひゝ。岡部の日記まえゝ法を。ふかまの引ふ
ほ半ふとせられて。いとみゝかもゝういあれと。花
るとゆのかゝこふゆまて。古田のゆ一の法ゆまを。ゝゝ利
まゝこるゝ。

享和のみとせ八月

同吉野の歌跋

四よ一のゆ歌を。ゆは一めち井の左ゆれるよ。翁のかれ
るゝ。左ゆ。ゝを。搭ゝ翁ゝはひゝゝ。ゝ。
係道別よれくるよゆ。ゆ後ゆ忘あて。人の道別乃
ゆよゝ法ゝるゝ。ゝゝひる井めゝ。ゝ得ゝれゝる。ふの
ゆ歌ゆは。翁のかれゝるあまゝあて。ゝれかをみ法ゝこの

おこのよもれそうやすくれまるをはよ春不徳之の板て
をつかくるをもそれをとををををいかをかるを
いと得かくうくをおゆれ。さるいせるあくひなれ色かくを
ひつ春しや。

橋の筏書新百人一首色紙跋

色紙まのかくやう。いすしへをさまをくる詠おすし板。
せくをくりてをりれのつすくをのをいて来てをいみをりよい
えをへりぬををいなりぬ。さるはたうの人乃ふひまをりし
なる我。この橋乃筏のかくれる玉首こそ。人のをかしは
ぬをんをくをりよきれとて。をくをのあるをのををくう
板を来くるいうへなり。かくて世をも居くはをくへをて

ゆうん幸いいうしれをれをはをを。

筏書古今七十の賀代字乃跋

さをくをを月のををくうをぬふなりをれ筏の七十のあき城
いをふをを。それをうをやかくの人ををねるか板校の思ふ。
うをけの赤詠を別をまうくなる新をの新志法をり
をはいて。をはの書れをを多数なきを。板乃みをりの色を。
ひをくをは落をめををやをれて。をりるをかなるもんゆく新
なり。赤めの云をいをうの人のなをあくくをれてはうう
をるををくかをへのをれちいてををいをををわくして。
ををれくをもるくををり。かをきくのかをくは。あくの屏風
一云くを。筏をうしの詠のをうはを形。をのをのかをいをくを

きたるまゝにてあるかの人なみだをながしてこ
酒すゝめなどしつゝみさるれるをかよきしかとうるしもぬ
きつゝしうとゝとしたおそしまのおよ業れぬのえもいたる
たゝまいもゝきたるを大きやうれるかゆるいくばくもかくさし
るるをそのかさしゑゆるけのんとへなるしがくて人い
この花をことゝにたまてあるをゝ法乃秋をあきれみあまれを
下蔭の淵となるをまもちもろこしれあとをもうたのつる
ちとをもれもいいておのうちうものとゝまるれんあるさち
まる。かれあるかの人ゝ世ことのなれたるとゝよきよのゆをよ
しきるてまたのれるむゝををひのさみのきみうさた
はつうれきをもまれて。いきうとゝたまるくかをはく。

いてやをまふをはめまて。八十九十のよはひかそへ日うも。
ねるこのたのしよかをゝりる。おのれをもまをさしぬるをはめる
をかをかるをも。この歌のたのうたをいをはすとてなん。

佛跡をほむる歌碑の跋

寶曆の十まり三とせの春。縣居れ翁すとゝもかをれて。その志の
かををはすめむつまきいつるもむるゝ。よりけるのふを受
やて。大和の國まはのれををきる時。だるの歌のあるうみめくを
けるついてよ。藥師寺まはいるゝて。世碑はすかうはしるなち。
旅のゆくてのわをそへ。いそきのをせるれしるを式のぬく
ゝも美せて。美濃の玉盛をはよて。境墨をてなんをて
たゝきる。世はうれをめてそこよりかるをいてるをよつきて。

それぞれの事おもひいつれをすてよ四十とやの むすめ。
あひともなひゆきし人も。てをひとりもあらぬなかぬ。
はるのもりなる一ぐも。爰とのことをいふ。しのいて
くれなれそとて。かくとあよそへふかせ

文化のもしめしをつぎ

涼月遺草跋

むかし。縣居の翁よ始まれへ女房。あまたなりしかの中よ。
志をもとめ。余をもとの二人をば。生こを後るることのみ人の
欲するもの。なれくもぐら後るくきかるる形いひあ是
をる。さるをやむことなきあるものうもそれ。
もみちよつきは。いとみとなるもの。おとの人のえらばた

義もつよる。此二人をもそかをいてそれをうる。又よのな
るかるまれひのかるもたとしくしかして。庵をもよく世
くるそなんをきる。そはをせうと弱度の孟一のめ。学よ
名をきせ世をかすけまい。をとをなれかをとをかるよりす
てまねひはるりをれる。おのれをはなすしたるみよむ
とて。をよ縣殿のめしれ影よゆきかをいれをよのまれつく
もるかるをるをを。ををかるアてるもあるまきぶ。ふおるの乃
をよせるをけつかしるるぬへきにはをををおはるをしる。この比
縣居の義は集ともせるしるるついてをはうるみ中よ。
此の二人の言乃葉をものかつるを葉をするるををいをれ。
いうをを一つめ行へとはるる。茂るの集ぶ。めるる人あるとい人

ゑをかくこと。はかりしれぬ。されどもあるものを
とりて。かく二ゑをばおせり。又も家を狂あるべきあり。つ
ゑを。こゝろかゝ業なりといつちふるきん。そもゝ。むかしこの
なきこゝをもしきれぬ。さてよのゑ。又の名を漢川ともいへり。
ひろうきる時より。紅の屋よりはじめてつゝをし
そ花て板をもとゝ。花となりて。ゑをしへよけり。
ゑをみきる。ゑをは。源氏物語とそいへる。是はこの絵をけん
六十あまりてなん。ゑまかゝる。

寛政五とせのとつよ